

# 構造化理論とイギリス・ニューレフト

——R.ウィリアムズ、E.P.トムソンとの比較を通して——

関東学院大学 高橋一得

## 1 本報告の目的

本報告は、A. ギデンズの構造化理論をイギリスの社会理論の系譜にあると考え、それまで論じられることの少なかった構造化理論のイギリス社会理論の側面から検討することを目的とする。「第三の道」の政治以降のギデンズは、倫理自由主義との親和性を示し、イギリス社会理論との連続性を明らかにしている。しかし、構造化理論においてギデンズは積極的にイギリス社会理論との関連性を示してはいない。構造化理論において、ギデンズはマルクス、デュルケム、ウェーバーといった古典的な社会理論、および、フーコー、レヴィ=ストロース、デリダなどの現代思想家の理論に言及している。この点から、ギデンズを「非イギリス」的な社会学者と捉えることは想像に難くない。しかし、ギデンズの議論、特に本報告で中心的に取り上げる構造化理論は、多様な理論に着目しながらも、その根底にはイギリスの社会理論の強い影響があると考えられる。

## 2 方法

構造化理論をイギリス社会理論との関連でみると、二つの視点を置くことになる。第一が構造化理論を諸個人の日々の経験の理論化として捉えるという視点である。構造化理論は「近代の存在論」と見なされるように、諸個人の日々の営みに焦点を当てたと考えられる。構造化理論では、特に実践概念に着目する。実践概念とは、諸個人の日々の営みに他ならない。こうした日々の営みによって規範や秩序が構成され、諸個人の意識が形成されていくのである。構造化理論は、こうした諸個人の日々の経験に焦点を当てた理論と考えられる。

次に、イギリス社会思想において、諸個人の日々の経験に焦点を当てるということを重視したのが、ニューレフトと呼ばれる思想集団である。イギリス・ニューレフトの代表的な理論家である R. ウィリアムズや E.P. トムソンは人々の経験の重要性に気づき、それを理論化するように努めた。日々の諸個人の経験の重要性を説いたという点で構造化理論と共通性を持つのがイギリス・ニューレフトの思想である。本報告で構造化理論のイギリス的側面を明らかにしようとするときに取り上げるのは、こうしたイギリス・ニューレフトの思想である。この点が構造化理論とイギリス社会理論との関連を見るとき第二の視点である。

## 3 結論

最後に、本報告では、構造化理論とイギリス・ニューレフトとの理論的共通性を明らかにすることによって、構造化理論のイギリス的側面を明らかにする。しかし、当日は、構造化理論のイギリス的側面が明らかになることだけではなく、ギデンズ、そして、ウィリアムズやトムソンが諸個人の日々の経験や実践の着目することが、どのような意味を持ちうるのか、またどのような理論的視点を開いていくのか、といった点まで言及することにしたい。

## 参考文献

Giddens, A. 1984 *Constitution of Society* Polity Press=門田直樹訳 2015 『社会の構成』勁草書房。

Giddens, A. 1987 *Social Theory and Modern Sociology* Polity Press=藤田弘夫監訳 1998 『社会理論と現代社会学』青木書房。

※その他、詳細な参考文献は当日のレジュメに記載します。